

ハリエット・アン・ジェイコブズ

『ある奴隷少女に起こった出来事』

(大和書房、堀越ゆき訳、2013年)

Harriet Ann Jacobs

*Incidents in the Life of a Slave Girl*

峯 真依子

完敗である。黒人研究を曲がりなりに専門としてきた私が、ある書店でこの本が平積みになり、現在のブームを目の当たりにしたとき、大きな敗北感におそわれた。なぜなら、よりによってあのジェイコブズの自伝である。それは、黒人研究やエスニック・スタディーズに携わる者たちにとって、あまりにも基本文献であり、あまりにも手垢がついた本であったはずだった。それなのに、スレイヴ・ナラティブを研究してはきたが、駆け出し程度の私よりは、はるかに優秀な研究仲間たちでさえおそらくまったく知り知らないところで、ジェイコブズの自伝はそっと復活し、読者たちとの間に親密な関係を築いていた。つまり、先入観のない読者たちに、私の方が完敗したのである。

週刊文春、AERAをはじめ多くの書評で繰り返されている事であるが、この本のあとがきに書かれた出版までの経緯について、簡単に紹介したい。訳者の堀越ゆき氏は、「私が本書に出会ったのは、ほんの偶然——出張で飛び乗った新幹線で、時間をつぶすためだった。2011年8月のことである。(中略)PCの電池が切れた手持ち無沙汰で、ふと懐かしい「ジェイン・エア」を読む気になり、私はiPhoneでKindleストア内を探しはじめた。世界古典名作ランキングの上位に「ジェイン・エア」はすぐみつかった。そのすぐそばにちょこんと並んでいたのが、本書だった」(293-4)と言う。しか

し、彼女はこうも言う。「奴隷少女が自分らしく生きるために感じなければならなかった心情が、現代の日本の少女にとって、そんなにかけ離れたものであるとは、率直に私には思えない」(297)。

堀越はあとがきの中で、今の日本の少女たちが、右も左もわからないまま無防備に投げ出されるグローバル資本主義を、現代の「奴隷制」になぞらえる。それは彼女自身が世界最大手外資系コンサルティング会社に勤務し、グローバル資本主義の最前線で日々たたかっている元少女であるからこそわかる切実な危機感ではなかったか。堀越は言う。「彼女たち（または彼女たちの夫ら）の熱意やひたむきさとはまるで無関係に、東京本社意向で突然閉鎖されたり、国内や往々にして海外に売られ、新しい社名の看板が届く前に、閉鎖・縮小が決定される」(293-4)。まさにそんな企業買収・売却のアドバイスの仕事を、彼女自身が行っているというパラドックス。それでも彼女はいう。「気づいた私が今やらなければ、いったいつ、誰がやってくれるのだろうか」(304)。「今の少女たちを取り巻く環境は、私が少女だった時代より、何倍も悪化している」(296)。

現在、働く女性が全国で2770万人いるうち、不安定な非正規雇用で働く女性の割合は、57.5%と男性の2倍以上だという。そして、単身女性の3分の1が、年収114万円未満といわれており、深刻化しているのが、10代、20代の若年女性の貧困である（NHK クローズアップ現代「あしたが見えない～深刻化する“若年女性”の貧困～」2014年01月27日放送）。この過酷な労働環境と、雇用の不安定さ、どれだけ働いても生活が変わらず、抜け出す手だては細い細い糸をたぐり寄せるように難しい。これではたしかに、奴隷制度と心象風景そのものは、あまり変わらないのではないか。もちろん、かつての封建時代のような身分制度ではなく、身分が固定化されているわけでもない。しかし事実上、社会的上昇を阻むさまざまな壁によって、非正規雇用という身分（つまり貧困層）に固定化されているのが今の少女たちを取り巻く現実である。

もちろん、ジェイコブズが読まれているのは、日本だけの現象ではない。そして日本だけでなく、アメリカにおいてもまた、ジェイコブズの持つリア

リティは、広がり続ける格差と無関係ではないだろう。振り返れば、2000年代はパリス・ヒルトンのブームにはじまり、アメリカのTVドラマでは『ヒルズ』(2006-2010)、『ゴシップ・ガール』(2007-2012)と、ゴージャスな階層の若者を描く作品が増えるなど、セレブ人気のひとつひとつを挙げればきりが無い。映画では、2013年公開の『華麗なるギャッツビー』が思い起こされるが、この作品がなぜ今、ふたたび映画化されたのかを、よく考える必要がある。

そして興味深いことに、一方でこの数年は奴隷制度に関する映画もたてつけに公開されており、『リンカーン』(2012)、『ジャンゴ——繋がれざるもの』(2012)、そしてソロモン・ノーザップのスレイヴ・ナラティブを映画化した『それでも夜はあける』(2014年春日本公開、第86回アカデミー作品賞受賞)などが挙げられる。これらの一連の現象は間違いなく、「格差」や「階級」に加え、いまや「奴隷制度」が現実を映し出す、ひとつの強力なメタファーになったことの表れのように思える。そして、このジェイコブズ人も、大枠ではその流れの中に位置づけられるだろう。

最後に、本作の優れている点について、少し触れておきたい。まず構成についてであるが、本作は、1861年の出版当時のオリジナルにはない「I 少女時代 1813-1835」、「II 逃亡 1835-1842」、「III 自由を求めて 1842-1861」の3つの任意のタイトルに割り振られており、おそらく迷子になる読者もいたに違いなかった長いオリジナル版が、小気味良く整理されている。また、章もオリジナル版と比較して、おそらく5章ほど少なくなっており、したがって、正確に言えば一種のabridged版である。しかしそのおかげで、これまで一般的にスレイヴ・ナラティブ作品が受けてきた批判の一つである冗長さ、くり返しの多さといったマイナス面が取り除かれ、ジェイコブズが追手を逃れ、自由になるために行動するスピード感が強調される。そしてそれは、現代の読者でも、飽きさせることがない。

また、研究書であれば、最後か最初に資料や地図、注などがまとめて紹介され、読後にテンションが下がった頃に資料に目を通すのが常であるが、この本は違う。場面に合わせてこのような関連資料や地図が添えられているた

め、読みながらのテンションで、しかも小説の流れをじゃましない分量でそれらに目を通すことができる。このような親切は小さいことのようにであるが、実はそうではない。読み手のことを考えれば、本来当然そうあるべき本作りの姿勢ではないかと思ひ、学ぶ所が多かった。

次に、本作の解説の部分で、佐藤優氏も絶賛していることであるが、翻訳のすばらしさが挙げられる。堀越の訳は、ジェイコブズの祖母が焼いたソーダ入りのビスケットは心底美味しく思えて食欲をそそり、奴隷の女達の軽快な会話のシーンでは、とくにそのような描写はないものの、まるで彼女達が腰にきゅっと巻きつけた仕事用のエプロンまでが見えてくるような気がする。気に入った訳はたくさんあったが、そのうちのひとつの箇所を、紹介したい。

今度はどこに連れて行かれるのか、まったくわからなかった。ベティは船乗りの着衣を、上着、ズボン、防水帽と一そろえ持ってきた。今後入用なことがあるかもしれないと、彼女はさらに小さな包みをわたしに持たせてくれた。明るい大声でベティは言った。「あんたが自由な土地に行けるなんて、あたしゃほんとにうれしいよ！ このベティさまのことを忘れないでくれよ。きっとそのうち、あたしも行くからね」

わたしはこれまでのベティの親切に、感謝の気持ちを伝えようとしたが、ベティがそれを止めて言った。「礼なんか要らないよ。あんたを助けてあげられて、よかった。それで、神さまがあんたのために、道を開いてくださるといいね。さあ、下の門まで送っていこう。ポケットに手を入れて、船乗りみたいにブラブラ歩くんだよ」

わたしは言われたとおりにして、ベティも満足してくれた。(156)

これはジェイコブズが船乗りの変装をして逃亡する場面であるが、ジェイコブズのような20歳かそこらの普通の女の子が、船乗りの男の歩き方を上手に真似してみせる様子と、手を貸したのにちっとも偉ぶらないベティとのやりとりが良く、とても生きいきとしている（そもそも、オリジナルでは

“Don't forget ole Betty” だったのを「このベティさまのことを忘れないでくれよ」とするセンスは、なかなか出て来ない訳出ではないだろうか？）。このように本作には、ジェイコブズは、実はこう読んで良かったのだという発見が随所にあり、本作の出現は、黒人研究にとっても新しい扉が開かれたと言ってよい。

さて、ここで、冒頭で述べたような私のちっぽけな敗北感などは綺麗さっぱりぬぐい去り、あらためて、次のように言い直してもいいだろうか。200年前に生まれたアメリカで自由を求めて行動した少女と、今の日本で生きる少女たちが置かれている現状を憂い、今回の翻訳に至った行動力のある元少女に「乾杯」である。